

琉球大学学術リポジトリ

単飼ケージに2羽飼い養鶏

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 祐一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21032

単飼ケージに2羽飼い養鶏

現在、沖縄の採卵養鶏家が、もっとも多く利用しているケージは、前巾8寸内外の単飼ケージで、この中に、産卵鶏を1羽ずつ入れてあるのが普通であるが、この8寸ケージに、2羽ずつ入れても、1羽ずつ入れたのと同様に産卵するのであれば、鶏舎や施設に要する経費は半減することになり、鶏卵の生産費を安くすることが出来る。

ケージ養鶏の密飼については、アメリカのアリゾナ州の試験場において行った研究結果が報告されているが、この報告によると、8寸ケージに1羽飼いの成績と1尺ケージに2羽飼いの成績は殆ど差がなかったということである。

沖縄は、高温多湿の国であるから、8寸ケージに2羽ずつ入れると、6、7、8月の暑い季節には、暑さの度合いも益々増加し、鶏の健康を害し、産卵成績に悪い結果を及ぼすことが、考えられたのであるが、実際に、8寸ケージに2羽飼いをやってみると、鶏の健康と産卵に、想像していたような、悪い結果は出ないで、1羽飼いと同様の成績が得られたので、この試験結果が養鶏家の御参考にでもなればと考えて、報告する次第である。

試験に用いた鶏は、1964年10月ふ化の、白レグで、餌付後160日で産卵50%になったので、1965年4月1日（餌付後163日目）から7カ月間の産卵成績、飼料消費、健康状態を調査したものである。

試験に用いた若雌は、全部で144羽で、その中、48羽は、8寸ケージに1羽ずつ入れ、96羽は、同じく8寸ケージに2羽ずつ入れた、8寸ケージに2羽も入れると、2羽がいつもくっついていなければならないほど狭いので、鶏に対して、気の毒のような気がするが、鶏の健康上に悪い影響はみられなかった。

飼料は、市販の成鶏用粉餌を用いて、朝夕2回に分けて与え、十分食わすように努めた。飼料は毎日秤量して、正確に給与量を記録した。

給水は、毎日1回取換えた。青菜は給与せず、小石は2、3日おきに餌箱に入れて与えた。

なお、尻つつきを予防するために、中ひなのときに、くちばしを切って、つつきあいをしていないようにした。

産卵成績と産卵率は、次の表のとおりであった。

産卵成績

	産卵率 (ヘンデイ)	産卵数 (ヘンハウス)	1個当卵重 量	飼料 要求率
1 羽飼い区	70.1%	142.0 個	53.9g	2.5
2 羽飼い区	75.1	147.4	53.8	2.4

月別産卵率（ヘンデイ）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	平均
	%	%	%	%	%	%	%	%
1 羽飼い区	79.9	75.0	65.3	68.0	67.8	68.2	65.2	70.1
2 "	79.3	78.4	76.2	78.3	72.7	71.1	68.2	75.1

この産卵成績は、4月1日から10月末まで、214日間の産卵成績であるが、産卵率と産卵数は、2羽飼い区が、1羽飼い区よりも、却ってよい成績を示している。卵の大きさや飼料要求率は、両区の間には差がなかった。産卵率（ヘンデイ）というのは、この場合214日間の総産卵数を、鶏の延羽数で割って、パーセントを求めたもので、産卵数（ヘンハウス）というのは、総産卵数を、試験始めの鶏の羽数で割って求めたものであるが、試験期間中に鶏が、沢山死んだりすると、産卵率は、よくても、産卵数は、少いという結果が出ることもある。

この試験で、一番心配していたのは、6、7、8月の暑い期間に、2羽飼い区の鶏が、暑さのために、食欲が減退して、弱くなるのではないかと、いうことであつたが、実際の成績をみると、第2表のように、2羽飼い区は、1羽飼い区に比べて、産卵率は良く、特に6、7、8月の暑い時期には、10%近くも、2羽飼い区の成績が良くなっている。これは、私の想像とは相反していて、少からず不思議であるが、その原因については、次のようなことが考えられる。

1羽1日当飼料給与量（g）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	平均
1 羽飼い区	91.7	91.7	90.7	90.3	90.9	94.5	97.6	92.4
2 羽 "	93.8	90.6	95.3	91.2	93.2	94.6	98.0	93.7

(10ページへ続く)

(2ページの続き)

この表に示されるように、毎日の飼料の消費量は、2羽鶏い区が、1羽飼い区よりも多く食っている。特に6、7、8月においてしかりである。これは、2羽飼い区の場合は、同一ケージ内の2羽は、競争して飼料を多く食うので、2羽飼い区の暑さの不利を克服して、むしろ1羽飼い区よりも、産卵が良いという結果を生じたのではないかと考えられる。このことについては、もっと試験を続けたいと考えている。

死亡率は、214日で、1羽飼い区16・7%、2羽飼い区 15・6%で、殆ど差はみられなかった。この死亡率は、琉大農場の成績としては、もっとも悪い方であったが、1羽飼い区も2羽飼い区も同様に死んでいるので、健康状態は、両者の間に差がみとめられなかったと考えている。

以上のことからみて、8寸ケージに鶏を2羽づゝ入れて産卵させても、1羽飼いの場合と同様の産卵成績をあげることができるということになるが、この場合注意すべきことは、鶏舎内の換気をよくするように、十分注意して建築しないといけない。鶏の体温は、41～42°Cの高温であり、体の新陳代謝もはげしいのであるから、たえず、新鮮な空気を鶏に与えるように注意が大切であり、また鶏舎を清潔に保ち、空気の汚染・病原菌等のまんえんを防ぐよう注意することが必要と考える。

この単飼ケージに2羽飼い養鶏については、すでに実行に移して居られる方もあると聞いているが、興味ある方は、実施してみられたらいかゞでしょう。

しかし、ケージは、同一ケージ内の2羽の鶏が同時にくびを出して餌を食いうるようなケージ前面の鉄線の配置のものでないといけない。新しい型のケージは普通そうになっている。又8寸巾のものよりも1尺巾位の、広いケージの方がよいのではないかと考える。

(松田 祐一)